

〔ウメ早期成園化技術の実証（受託研究）〕
ウメ4品種の樹体ジョイント接ぎ木時期別活着率

河野 章・杉田交啓
(園芸技術科)

【要 約】ウメ樹体ジョイント仕立てにおける接ぎ木は、3月から7月に行った場合、75～100%の高い活着率を示したことから、春期から夏期にかけて接ぎ木が可能であることが明らかとなった。なお、品種による活着率の差はみられない。

【目 的】

樹木の樹体ジョイント仕立て法（特許第4895249）は、1本の長い苗を接ぎ木して直線状の集合樹とする果樹の仕立て法である（図1）。本仕立て法における接ぎ木は、穂木にあたる部分（先端側）が主枝と繋がった状態であるため、通常の接ぎ木より活着率が高いことから、接ぎ木適期幅の拡大が想定される。そこで、本試験では、本仕立て法における時期別の接ぎ木活着率を明らかにする。

【方 法】

供試品種は、「南高」および青梅市由来のウメ3品種「梅郷、玉英、鶯宿」の計4品種とし、前年に育成したジョイント仕立て用2年生大苗（新梢長2m以上）を用いた。栽培管理は0.4mm目合いのネットハウス内で行い、大苗は前年に用いた用土量12Lを入れたポットで育苗したものを引き続き使用した。接ぎ木は2014年3月から7月にかけて計5回、毎月中旬に行い、各回、各品種あたり4～6ヵ所行った。活着の有無については、接ぎ木3～4ヵ月後に、接ぎ木部から元樹の主枝基部に向かって約15cmの位置を切断し（図1）、2週間後に接木部付近に発生している新梢の枯死の有無により判断した。

【成果の概要】

1. 接ぎ木時期の違いによる作業性：3月は、新梢発生前であり、また、植物体中への水揚げ期以降であることから枝の取り扱いが容易で、接合部の調整もしやすく作業性が高かった。4月は新梢長約5cm、5月は同約30cmであり、新梢の発生方向、強弱が判断できることから、接ぎ木部位の選定が容易であった。6、7月は繁茂（同1m以上）しているほか、気温・湿度も高く作業環境が悪くなったことなどにより、作業性が低下したほか、木質部の硬化により作業時間がやや長くなる傾向であった（データなし）。
2. 時期別活着率：3月および7月接ぎ木区は、すべての品種で100%の活着率を示した。4～6月接ぎ木区は、6月接ぎ木区の「南高」および4、5、6月接ぎ木区「玉英」でそれぞれ1ヵ所に不活着が認められたが、75～100%の概ね高い活着率を示した（表1）。
3. まとめ：ウメ樹体ジョイント仕立てにおける接ぎ木は、3月から7月に行った場合、75～100%と高い活着率を示す。また、品種による活着率の差はみられない。しかし、6月以降の新梢伸長期に接ぎ木を行うと、新梢の繁茂などにより作業性が低下することから、3～5月に行うことが望ましい。

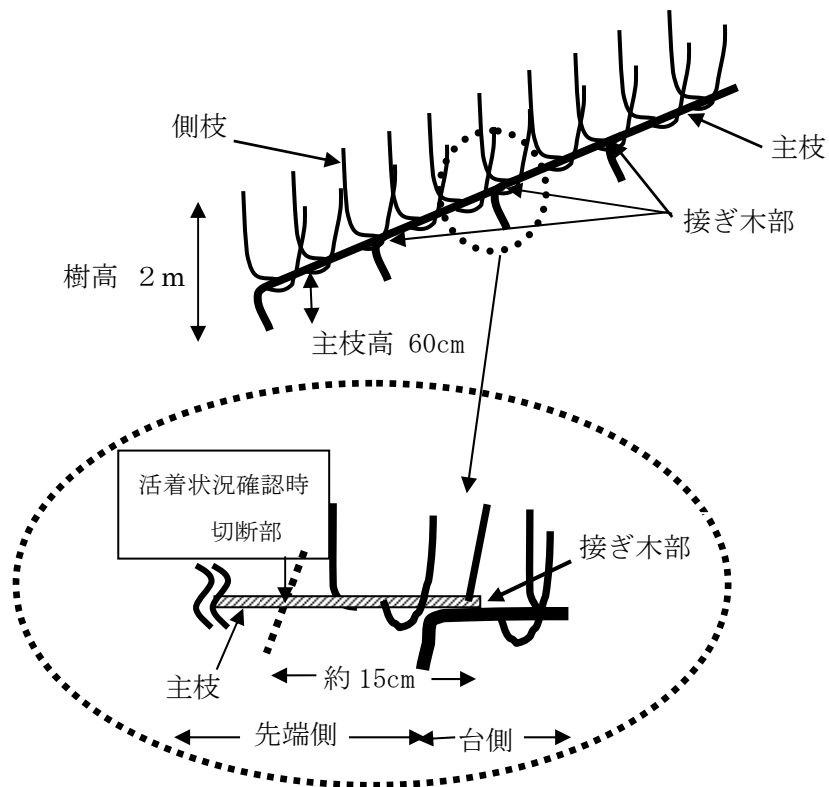


図1 ウメジョイント仕立て模式図（上）および接ぎ木部拡大図（下）

表1 ウメ4品種のジョイント接木時期別活着率

接木時期	南高		梅郷		玉英		鶯宿	
	活着数(本) /接木数(本)	活着率 (%)	活着数(本) /接木数(本)	活着率 (%)	活着数(本) /接木数(本)	活着率 (%)	活着数(本) /接木数(本)	活着率 (%)
3月	4/4	100	4/4	100	4/4	100	4/4	100
4月	4/4	100	5/5	100	4/5	80	5/5	100
5月	5/5	100	5/5	100	4/5	80	5/5	100
6月	3/4	75	4/4	100	4/5	80	5/5	100
7月	6/6	100	6/6	100	6/6	100	6/6	100